

農業分野におけるオープンAPI整備に向けた検討会（第3回）
議事概要

日時：2020年12月3日14:00～16:00

場所：合同庁舎4号館1219-1221号室

出席者：上原委員、榎委員、木下委員、齋藤委員、澁澤委員、高橋委員、
錦織委員、藤原委員、松澤委員、丸田委員、三谷委員、吉田委員

概要：次第に沿って議事を進めた。概要は以下のとおり。

【資料1について】

- ガイドライン案について意見なく、了承された。
- ガイドライン案は、次回の検討会までに事務局がパブリックコメントに付す予定。パブリックコメント前の軽微な修正については、座長一任となった。

【資料2について】

- 農業者が利用するデータは、オンラインでリアルタイムに利用する方法とソフト等に蓄積されたものを後で利用する方法の違いにより、大きく前提が異なる。API実装に向けては農業者がどのようにデータを利用するかを考える必要がある。
- 実際にAPIで農機データを営農管理システムに組み込む際には、ユーザーが膨大なデータを使いこなせるかということや、いかにシンプルに見せるかというような議論になると思う。そこに関しては競争領域であり、メーカー・ベンダーにマーケティングしていただき、ユーザーの選択に委ねることが重要。
- サービスの実装に当たっては、例えばドローンのセンシングデータを取り込んで活用するなど、後々にデータ活用の幅が広がることを見据えて、拡張性を持たせて欲しい。
- 同じ「作業時間」でも、生のデータや利用方法に応じて加工されたデータなど、データの属性を明らかにした上でAPIを作成する必要があるのではないか。

- まずはリアルタイムで出していくデータとサーバーに蓄積されているデータを営農者が1つの画面上で見られるようになるということが、今回目指すべきゴールであり、データの属性を統一するのは次のステップだと思う。
- 同じ作業時間でも、作業工程に紐付くものと機械に紐付くものがあり、その違いをベンダー側が把握できるようにAPIを整備する必要がある。理想としては一定のルールの下でデータが入ってくると使いやすいが、難しいことと承知しているので、ベンダー側としては可能な限り工夫したい。
- 農業者からは営農管理ソフトへの入力に手間がかかるとの意見があり、将来的には農機から得られるデータが自動的に入力されるのは良い。
- JSONのデータ形式にはデータに意味を付ける“キー”があるので、企業間でやりとりする際にデータの意味合いがわかるようにAPIを整備することが、今後の協調領域での課題になると考える。
- 今後、データの規格化、標準化を行う上で、農機メーカー同士で確認・検討する場が必要。

<結果>

- ・資料1のガイドライン案について、事務局はガイドライン案をパブリックコメントに付すこと、パブリックコメント前の軽微な変更については座長に一任することとなった。